## 今月の谷口雅春先生のお言葉

# 子供に言って聞かせるときには

### 恐怖や威嚇で子供を導いてはならない

われわれは、人を導く場合に、恐怖心を起こさせるような方法によって善に導いたところが、かくして為される善は本当の善ではないのでありますから、人間を本当に善人たらしむることはできないのであります。

恐怖心を刺激して無理に自己がなそうと思っている悪を抑えますと、一見、悪が消滅したように見えますけれども、決してその悪をなそうとする衝動が消滅したのではないのであります。悪をなさんとする衝動は押し込められて窒息してはいますが消滅したのでありませんから、何か他の形で現われようとする傾向が自然と出てくるのであります。むろん「これをしてはならない」と威嚇しグッと抑えつけてしまいますと、一時はそれをしなくなるかもしれませんけれども、他のところからいろいろの行為に代償的に現われてくるのであります。そうなりますとせっかく人間を善くしたように見えても決して善くしていない。ひねくれ坊主をこしらえたことになるのであります。ですから強制と威嚇による児童の善導は本当に児童をよくする道ではないということになるのであります。それでは児童を善くしようと思ったならば、どうしたらいいかと申しますと、親自身が心に善を描き、行ないに善を示して、それを模倣さえすれば、児

童が自発的に道徳善ができるように仕向けてやるほかはないのであります。（『生命の實相』頭注版第30巻84～85頁）

## 子供の中に宿っている善を信じて引き出す

子供をよくしようとするには、児童を頑是ないわからず屋だと思わないで児童の神性は必ずや善を理解しうると信じて道理を説いて聞かすのが一番良いのであります。道理を説いて聞かすということは小言を言えということではないのであります。道理を説き聞かす場合にも、こちらが興奮して棘だったような顔つき、語調をして話すならば、言葉は道理を説いていても、それは叱責となり、かえって反抗心を昂めてなんにもならないのであります。道理を説いて聞かすということは、相手の中に道理が宿っていることを信じて拝むのであります。子供は神の子であるから「神」すなわち「真理」であり「道理」であるから子供の中には必ず道理が宿っているのであります。子供に宿っているその道理を拝む。拝む気持になって尊敬しつつ柔しく道理を説いてきかさねばならない。「あなたは神の子である、善の子である、道理の子である、真理の子である、あなたの中には善があるんだから、善をなすのに極まっている」と、その神性を認めてその子供を拝むような気持になって、静かにその宿っている道理を引き出すようにして話しかけるのであります。（『生命の實相』頭注版第30巻85～86頁）

## 一人のどなり声が家庭を不快にし、子供を損ねる

子供に道理を説いてきかすことには二重に収穫があります。それは、一方において子供の心に明晰な思考力と推理力とを生長さし、他方においては、道理に従うという従順さを湧き起こらせるからであります。これに反して、叱言や威嚇で子供を良くしようとしますと、家庭の中に叱咤や罵詈が絶えないで家庭の中が火宅のようになってしまいますが、道理を静かに説いて聞かすところには、そんな恐れはありません。家庭で一人のどなる

人があるために、どんなに家庭が不快になるかということは、皆さんがすでに実験済みであろうと思います。（中略）子供をよくしてやろうと思って、ただ一回がんとどなる、その金切り声が、どんなに回り回って家庭の全体を悪くし、子供を損うかもしれないのであります。ですから、われわれは子供を善に導こうとするならば、常にまず相手に宿っているところの道理を拝む、神性を拝む、仏性を拝む、そして優しい言葉で、子供に宿っている道理、神性、仏性を導き出すようにしなければならないのであります。（『生命の實相』頭注版第30巻87～88頁）

## 周囲が喜ぶような生活をする心を養いましょう

教育とは圧迫ではなく、誘導であり、「引き出し」であります。子供の欲望の中にはまだ整理されない雑草があることは認めなければなりません。この雑草を刈りとるには、善きものを誘導することによって、雑草が自然に枯れるような方法を採るのがもっともよいのであります。（中略）児童の生命を、その本来良き花を育て引き出すようにして、雑草を枯らすように枯らすようにしてゆくとよいのであります。個性を尊重することも必要でありますけれども、人間は社会的生物でありますから団体生活を営むものであります。家庭も数人集まっていますから一個の団体生活であります。（中略）人間は一人だけではなしに、自他一体、持ちつ持たれつの存在であって、ただ一人だけわがままをやる、そういう心は雑草の心であります。そういう雑草の心は摘み取らなければいけないのであります。

よく、読者の方が「われわれの生活に実相が出ているか、出ていないかということは、どういうふうにしたらわかるか」ということを尋ねられますが、（中略）実相が現われた生活とは、周囲全体を一緒に生き生かしてゆこうという生活が、実相の顕われた生活であります。周囲全体が皆栄えるように、皆が喜ぶように、現われる生き方ならば、そこに実相がよく出てくるのであります。

（『生命の實相』頭注版第30巻89～91頁）